

## セントラルマーケットの店

雨が強くなったので体が半分ほど濡れてしまうがあまり気にならない。アナは店の奥に入れと言うけれど断って、ついでにサンミゲルをもう一本たのむ。狭くて清潔とは言えない店だけれどホテルの西洋料理風のまぜい夕飯を食べるよりはましだ。店にはカラオケが入っている。カラオケと言ったって曲が何曲もあるわけではない。5回に1回は誰かが"Release me"を歌っている。古いウエスタンで、確かハंक・ウイリアムスが歌ったんだと思うが、ハंक・スノーだったかもしれない。あまりに古いので忘れた。ともかく日本じゃもう誰も歌わない。この国の男はこの歌が好きだ。たいてい上手で、渋い美声で思いを入れて、"~release me, my darling, say good-bye"と最後のフレーズを歌う。それぐらい女にもてると言いたいかもしれない。カソリックは離婚を認めないし、第一、この国では家族や仲間の絆から離れて生きる事は不可能だ。逃げられるはずがないだろう。

店が繁盛しているのはカラオケがあるからじゃない。アナがやっているからだ。8人兄弟だと聞いたけれど、店は母親や妹たちが手伝っている。アナは日本で1年ぐらい働いていた。でも、何故か僕らとは日本語で話さない。そのかわり英語は上手だし、タガログ語もイロノ語も話す。妹のビビンはそれにスペイン語も話す。必要に迫られて身につけたんだろう。末の妹のアイリーンは家政婦をやめてシンガポールから帰って、一時、店を手伝っていたけれど、子連れのオーストラリア人と結婚して向こうに行った。アナもビビンも子連れだが何故か亭主はいない。逃げちゃったのか死んじゃったのか、男の兄弟もいるけど影が薄い。アナの家は狭くて何家族もが折り重なって暮らしている。女兄弟が大家族をつないで、その真ん中に小太りでたくましいアナが立っているというわけだ。私だってアナにたよっている。困ったときの相談相手はアナしかいないから。そう思うとなんだかこの国の男になったような気がする。もう一本サンミゲルを飲んで、甘えた声で"~release me, my darling, say good-bye!"と歌いたくなる。

(20100915)